



# アカシア俳句会



令和五年 夏季俳句会 「句評」 夏の季語を含む作品 一〜五句

## 一、「特選句」 選定句評

### ○アカシアの木立は失せて友いづこ

西村敏治

◆アカシアの並木とともにあった私たちの青春 はるか遠くにきてしまったけれど 心はあのことと少しも変わっていない（つもり） 山家由紀

### ○大山陵かくれ泳ぎし五人組

西村敏治

◆この歳になると友を思う事が多く 大山陵の句は少年時代の表現で友人を想う心がよく表されています 佐藤茂弘

### ○石津浜三丘健児の遠泳路

西村敏治

◆無骨を誇り質実剛健を体現した三丘健児の隆々たる腕や脰脛が目には浮かぶようです 藤井光正

### ○快く響く筍自慢の齒

戸堂博之

◆筍 美味しかったでしょうね 心身爽快 楽しさ満開 申し分ないお幸せな境地が伝わってきます 中野亘子

### ○鼻歌もドレミ怪しきカタツムリ

藤井光正

◆鼻歌も ドレミが怪しいのも カタツムリも 全てがのどかで呑気で 何とも平和で心地よい句です 野本展子

### ○夕方に暖房入れる北の夏

都 福仁

◆高三の時 中村靖之介 松浦督と北海道国体の思い出が蘇りました ストーブに薪でしたが真夏の強烈な印象でした 戸堂博之

### ○赤ちゃんの握る手開けば初夏の風

加龍恵子

◆赤ちゃんの柔らかな小さな握った手が 開いた瞬間に初夏の風を感じるとは 素晴らしい感性だと思いました 吉田以登

### ○夏草の軒まで伸びて無人駅

加龍恵子

◆人の気配がないところに悠々とのびる夏草 句の自然なリズムと相まって素直で気持ちのよい一句だと思います 元永悦子  
◆何とものどかな風景に心癒されます 風景描写が上手です 都 福仁

○再びの明日香路今日は亡き友と

中野亘子

◆亡き友と無性に語らいたい時がある 迷い滅入り又甚く感動した時等も 一人で再訪の  
二人の旅路は一入かと  
網 佑子

○でで虫の命の限りの道光る

中野亘子

◆子供の頃に よく見かけた光景でした その観察眼に脱帽です 吉澤志保子  
◆八十路後半を迎えて 命が尽きる日までどんな足跡が残るのかと感じさせられました  
三木徳彦

○雨上がり青葉夕日に光り出す

吉田以登

◆線状降水帯多発 ホッと一息つく雨上がり 青葉の表に安堵の光・夕日一筋 自然に対す  
る心の機微を詠った秀句  
前田秀一

○朝顔の隙より入る風を待つ

吉田以登

◆じりじりとした酷暑 朝顔の花の横からすつと入る風はひんやりほつとします  
加龍恵子

○入道雲湧きたち空の雲と会う

吉田以登

◆いろいろな雲の形をよく見ているので・・・  
岩崎悦子

二、「編集後記」

◆「土生重次師俳句論」(\*\*)

\*..小川誠二郎編二〇〇一『抄録・重次俳句論―土生重次、かく語りき』（復刻）扉俳句会運営委員会

《今回の学び》

俳句は感動を詠う詩である

九十一頁

俳句は感動の詩である。作者のそれを共有できるところに鑑賞者のよるこびがある。作者の感動がなければ、当然読者を誘うことは出来ない。いかに巧みに俳句の形をとつていようと、原点は作者の感動である。

しかし俳句は短い。その感動を縷々「述べる」ことは出来ない。ポイントを「提示」するだけである。感動の広い世界は読者にゆだねなければならぬ。

俳句は沈黙の文学であるといわれる所以である。

俳句は四季の移り変わりのもたらす自然界の有り様を詠うものであるが、詠うのは人間である。その確かな存在が必須である。また摩訶不思議であり、かつ魅力的な存在である人間に対して感動する詩精神が不在ならば、そこには単に羅列された自然現象が形骸化してとどめられているに過ぎないであろう。

### 《これまでの学び》

既発行済「句評」編集後記掲載

◇「俳句は叙事詩である」 季語―非凡の一節を支えるもの 令和五年『冬季・新年俳句会』

◇「俳句はモノに託して心を詠う文芸である」 令和四年『秋季俳句会』

◇「俳句は“心”や“情”を直接的に詠ってはならない」 令和四年『秋季俳句会』

◇「俳句は“今”をとらえた文芸である」 令和五年『春季俳句会』

◇「俳句は“何を詠うか”ではなく、“いかに詠うか”だ」 令和五年『春季俳句会』

編集人 前田秀一

